

中等
教科

中
古
文
典

全

815.

H117t

078476-000-1

815-H117t

中古文典

芳賀 矢一/著

M38

DAC-2169



815.H.117t

著一矢賀芳士博學文

科教等中
典文古中



版藏房山富京東

244914

緒言

一、本書は中等教科諸學校の高級用として編纂せるものにして、明治文典に接續して、中古語法の一斑を學ばしむるを目的とす。

二、各課のはじめ、一段低く五號活字を以て印刷せる部分は、前學年に於て已に學習せる智識を復習せしめんとするものなり。

三、現今の文語と中古語と語法と全く同じきものは本書に説かず。教授者諸君は一方に於て質問、課題等、便宜の方法により、從來已に學得せる法則を復習してその智識を確實ならしめ、一方に於て中古語特有の法則を學習せしめ

中等教科中古文典 緒言

られんことを望む。

四、本書に引用せる例證は平易なる中古の文學書類より採り、歌は最も弘く人口に膾炙せるものを選べり。講習の際、其歌文の意義を口授せられなば、教授上の興味亦一層加はるべし。

五、卷末に連語表を添へたること、明治文典に同じ。教授者諸君は尙拙著活用聯語一覽を参照せられんことを望む。

六、中古文は生徒の誦讀、解釋し得るを以て足れりとせざるべからず。故に誤謬を訂正せしむるが如き練習題を課せず。

明治三十八年二月

著者しるす

中等教科 中古文典 目次

第一章 體言

(其一)名詞.....二

(其二)代名詞.....三

練習一.....六

(其三)數詞.....七

第二章 用言

(其一)動詞.....九

練習二.....九

(其二)形容詞.....二

練習三.....三

第三章 助動詞……………三
 練習四……………六
 第四章 用言の時……………一八
 練習五……………三三
 練習六……………三三
 第五章 用言の法……………三四
 (其一) 推量の法……………三四
 練習七……………三九
 第六章 用言の式……………三九
 第七章 用言の相……………三九
 練習八……………三九
 第八章 敬語謙語の助動詞……………三九

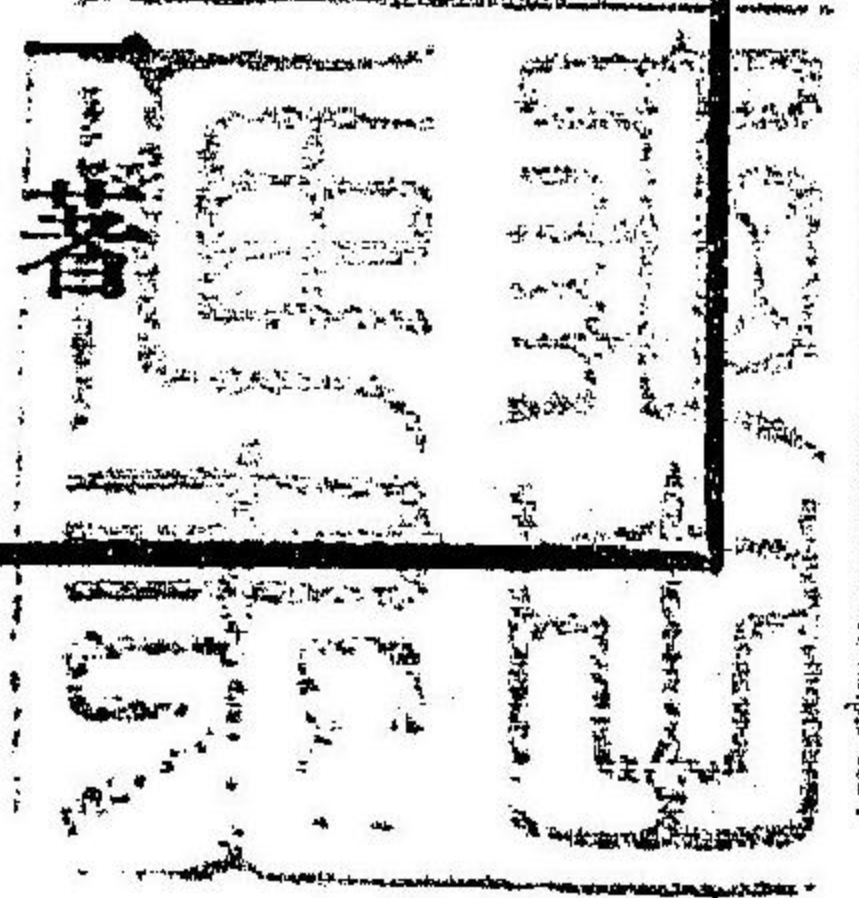
中等
教科

中古文典 目次終

練習九……………四五
 第九章 助詞……………三五
 練習十……………四二
 第十章 助詞を添へてあらはす種々の法……………四二
 練習十一……………四二
 第十一章 助詞に連る句……………四二
 練習十二……………四二
 第十二章 單語の構造……………四二
 練習十三……………四七
 附録 用言活用連語表……………四七

中等教科
中古文典

文學博士 芳賀 矢



言語は時代によりて變遷するものなり。余等はさきに現今普通に用ゐる文語の法則を學びたり。現今の文語はもと中古語に據れるものにて、今文の語法は大抵中古語にも適用すべれども、現今の用法にして、間々中古には用ゐざるものあり、中古の用法にして、今廢れたるもの亦尠からず。古文を讀み、古文を解せんには、中古語法の一斑を知らざるべからず。

第一章 體言

(其二) 名詞

(1) 日、月、犬、猫、亞細亞、日本、正成、秀吉、春秋、夢心、寸、尺、錢、厘、勉強、幸福等事物
一切の名をあらはす詞を名詞といふ。

- (一) たかみ ふかみ たのしみ
- (二) たかさ ふかさ たのしさ

右の如く、形容詞の活用くきを省きたる形にきみを添へて、性質、分量等をあらはす名詞をつくること、現今の語にも、中古語にもあり。

- (三) (イ) うつくしげ おそろしげ
- (ロ) 悪げ 物おもひげ

右の如く、形容詞又は動詞にげを添へて、物の有様をあらはす名詞をつくること、中古語に多くして、今の語には稀なり。

(其二) 代名詞

(2) 代名詞には余、汝、君、僕、の如く、人の名の代りに用ゐるものあり。
(3) これ、それ、かれ、こ、そこ、そ、ちの如く、事物、場所、方角を指し示すに用ゐるものあり。

- (三) わ わが われ (我)
- な な なれ (汝)
- か かの かれ (彼)
- た たが たれ (誰)

右のわ、な、か、たは人の名の代りに用ゐる代名詞なり。獨立して用ゐらるゝ事もあれども、又はのの助詞を伴ひて、下の

體言に連ること普通なり。このわ、な、か、たの下にれの添ひて
われ、なれ、かれ、たれとなりたるものは、獨立して用ゐる代名
詞なり。その中なれ、汝の外は皆今の文にも用ゐる。

〔四〕

こ	こ	そ	か	あ	い
この時	この時	そのふみ	かの花	あゝの山	いつの時
これ	これ	それ	かれ	あれ	いづれ

右のこ、そ、か、あは事物を指していふ代名詞、獨立して用ゐら
るゝ場合もあれど、の助詞を伴ひて下の名詞に連ること
普通なり。いつは獨立して時を指し示す。
こ、そ、か、あの下にれの添ひて、これ、それ、かれ、あれとなりたる

〔五〕

こ	こ	そ	か	あ	い
このは	このは	そのこ	かのし	あゝの	いつの
こち	こち	そち	かち	あち	いづち
なた	なた	そなた	かなた	あなた	いづか

もの及びいづれは獨立の代名詞として用ゐらる。
右のこ、そ、か、あ、いづにこを添ふれば場所をいふ代名詞とな
り、ち又はなたを加ふれば方角をいふ代名詞となること、右
の例に照して知るべし。但しか、あ、の直にこに續かずいつの
なたに續かぬことに注意すべし。

〔六〕

(イ) われら かれら

右の如く人の名の代りに用ゐる代名詞にも、事物、場所、方角等を指し示す代名詞にも、らの接尾辭を添ふることを得。人の名に代へて用ゐる代名詞、事物を指し示す代名詞にらの添ふときは、多くの數をいふ意となり、場所、方角をいふ代名詞の下にらの添ふときは、場所、方角を廣くさしていふ意となる。

こ。こ。ら。そ。こ。ら。等は中古語にては分量の多きを意味する語ともなれり。

練習一、左の文より代名詞を抽出せよ。

- | | | | |
|------|------|------|------|
| (ハ) | (口) | | |
| こちら。 | それら。 | これら。 | |
| | | そちら。 | そこら。 |
| | | | ここら。 |

- (イ) ほととぎす夜深く啼きていづちゆくらん。
- (ロ) ここやいづくととへば、土佐のとまりとぞいひける。
- (ハ) 岩屋戸に立てる松の木なをみればむかしの人をあひ見る如し。
- (ニ) 今の世にそれ細かに知らんためには、この物語を見るにまざることなし。

(ホ) 萬葉集よりあなたのは、事違くしてその様ふりたれば、おほたか古今集よりこなたをまねぶ事なるに、その代々の歌どもはみないやしき人のよめるにはあらず。

(其三) 數詞

- (1) ひと、つ、ふ、た、つ、ふ、つ、よ、つ、百、千、萬等の如き數をあらはす詞は數詞なり。

(七) 今文には十以上の數をいひあらはすには漢語より來

れる數字を用ゐて、十。十二。二十。三十の如くいふ。中古語にては十以上の數に、あまりの語を添へて、

十あまり一つ

十あまり二つ

などいふいひ方あり。又二十。三十。等十位の數はひとつ、ふたつのつの代りに、ち。又はちを用ゐて、

はたち―二十

みそち―三十

よそち―四十

いそち―五十

むそち―六十

などいへり。三十以上にはちと濁るなり。

今ははたち、みそちといへば、年齢を數ふるときのみ用ゐる。

第二章 用言

(其一) 動詞

(5) 動詞は活用の種類によりて四段活用、上二段活用、下二段活用、上一段活用、下一段活用、加行變格活用、左行變格活用、奈行變格活用、良行變格活用の九種に分る。

(6) 上一段活用以下六種の動詞は其數甚だ少し。

(7) 動詞の活用形は未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六ツなり。

〔八〕 中古語にて多く用ゐる動詞には、曩に學びたるもの、外、尙左の如き變格活用の動詞あり。

未然 連用 終止 連體 已然 命令

(イ) おはせ おはし おはす おはする おはすれ おはせ
 (ロ) いな いに いぬ いぬる いぬれ いね
 (ハ) はべら はべり はべり はべる はべれ はべれ

(イ) は左行變格活用(ロ)は奈行變格活用(ハ)は良行變格活用なり。

練習二、左の文より動詞を摘出し、その活用を語せ。

- (イ) 翁いふやう、われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。
- (ロ) 程なく歸らんと思ふが悲しく待るなり。
- (ハ) 春霞かすみていにしかりがねの今ぞなくなる秋霧の上に。

- (ニ) げに説經說法多く承れど、かくめづらしきことのため人は更におはせぬなり。
- (ホ) このおとどの子どもあまたおはせしに、女君たちは聲どりし男君たちは皆ほとくにつけて位どもおはせしに、これも皆方々に流され給へり。
- (へ) 流るゝ如くいぬる年かな。

(其二) 形容詞

(8) 形容詞はく、し、き、けれと活用す。但しく、し、き、けれと活用するとき、其上にしの音あるものは終止形にはしを重ねず。

〔九〕 きぬをうすみ 夜を寒み 山深み 人遠み

中古語には右の如くみに活用して用ゐることあり。この場合のうすみ、寒み、深み、遠みは大方口語のうすさに、寒さに、深

さ。に。遠。さ。に。の。義。な。り。連。語。又。は。句。の。末。に。あ。り。て。文。の。中。途。に。用。ゐ。る。を。常。と。す。

(二)

(イ) 音のさやけさ

波のしづけさ
みるがうれしさ

(ロ) 聞くが苦しき

右の如く終止形よりさに連りて名詞の如き形となり、述語として用ゐることあり。上の主語體言なるときはのの助詞を伴ひ(イ)用言なるときはがの助詞を伴ふ(ロ)。

(三)

あさましの事や

かなしの音信

右の如く、形容詞の終止形よりのの助詞につゞきて用ゐること、今文には稀なり。

(三)

櫻花ちらば惜しけむ

これ善けむ

右のけむはくよりありに續きたる形容動詞からむの約り

たるものなり。今文には用ゐること稀なり。

練習三、左の文より形容詞を指摘せよ。

(イ) もれいづる月の影のさやけさ。

(ロ) 秋の田のかりほのいほのとまをわらみ我が衣手は露にぬれつ

(ハ) 百しきの大宮人の参りいでてあそぶこよひの月のさやけさ。

(ニ) 布引の瀧と涙の瀧といづれ高けん。

(ホ) 恐ろしの物語やと耳を塞ぎてゐたり。

(ヘ) 風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ碎けて物をおもふ頃かな。

第三章 助動詞

へ。かり。り。き。の三助動詞は右の如く活用すれども、の中にある活用形は今文に用ゐることなし。中古文にはすべてその用例あり。

(13) 助動詞の意義よりいへば、たり。り。き。んの如きは時をあらはすものなり。

(14) べ。し。ま。じ。の如きは法をあらはす助動詞なり。

(二) 右に學びたるつ。ぬ。げ。りの三つは時の助動詞にして、め。り。らん。らし。じ。ま。し。の五つは法をあらはす助動詞、げ。ん。は時と法とを兼ねたるものなり。其意義は尙後にいたりて學ぶへし。

練習四、左の文より助動詞を抽出し、その活用形の名を舉

げよ。

- (イ) とし頃思ひつると果し侍りぬ。
- (ロ) かくて三里ばかりも來ぬらんと覺ゆるに、聞きしが如く草の屋二軒あり。
- (ハ) 嵐に咽びし松も千年を待たで薪にくだかれ、古き墳は鋤かれて田となりぬ、そのかただになくなりぬるぞ悲しき。
- (ニ) ある人の月ばかり面白きものはあらしといひしに、又ひとり露こそあはれなれと争ひしこそをかしかりけれ。
- (ホ) 四代の御門の關白にて再び攝政と申しき昔もいと類なきことにこそ侍りけめ。
- (ヘ) 朝顔をなにはかなしと思ひけむ人をも花はさこそみるらめ。
- (ト) 今はむかし在原業平といふ人ありけり、東の方にすむべき所や

- あるとてゆきけり。
- (チ) 年老いたる翁二人來あひて同じところに居ぬめり。

第四章 用言の時

- (15) 時には現在、過去、未來の三つあり又完了時として、その三つの時に於て已に完了せることをいひあらはすため現在、完了、過去、完了、未來、完了の三つあり、合せて六つの時あり。
- (16) 時をいふ必要なき場合と、現在の時とをあらはす場合には、用言のみにて、助動詞を添へず。
- (17) 過去の時をあらはすには、きの助動詞を添ふ。
- (18) 未來の時をあらはすには、んの助動詞を添ふ。
- (19) 完了の時をあらはすには、現在は完了には、たりの助動詞を添へ、過去

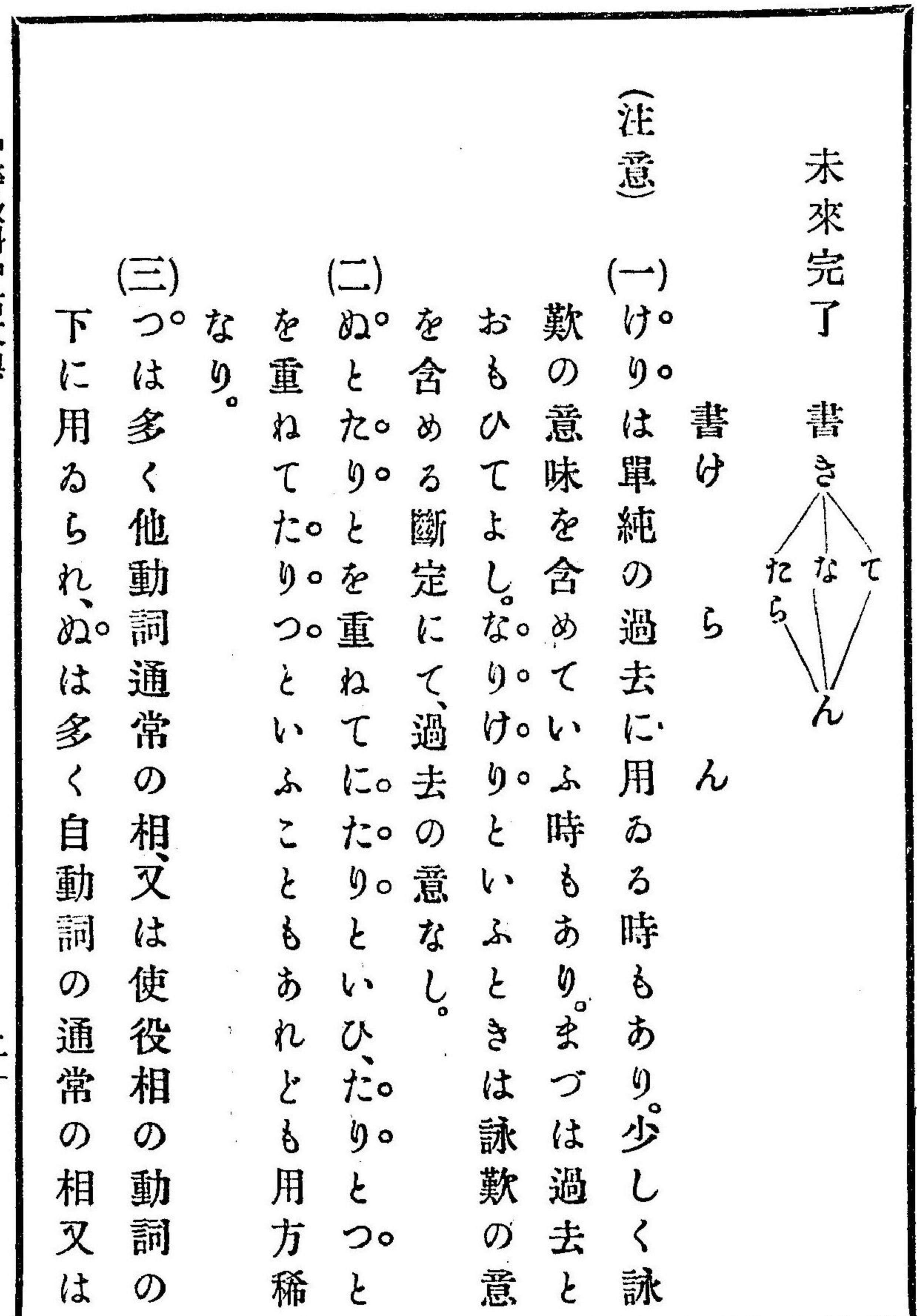
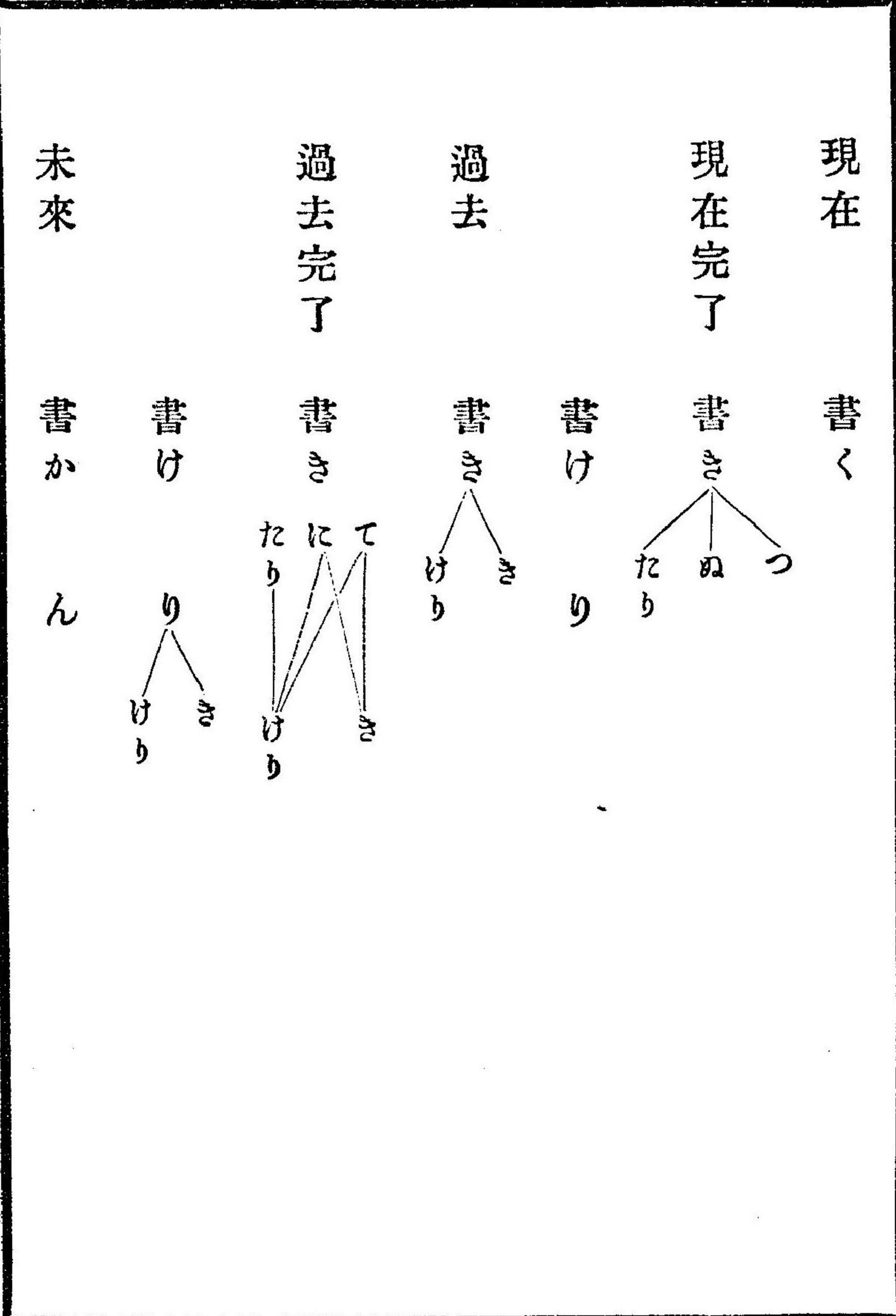
完了には、たりをきの上に重ねてたりき、未來完了には、んの上に重ねてたらんを用ゐる。

- (18) 完了の時を示す助動詞に、りあり、四段活用、左行變格活用、奈行變格活用に限りてつく。

(二六) 曩に學べる時の助動詞つぬは完了の時を示すものなり。書きつ、歸りぬといへば書きたり、歸りたりといふに同じ。

(二七) けりは過去の時を示す助動詞にて「書きけり」といふは時の値打にて「書きき」といふに同じ。

(二八) 完了の時をあらはすつぬ、過去の時をあらはすけりを加へ、書くといふ動詞につきて、時をあらはす連語を作るときは左の如き種々のいひあらはし方を得、



受身相使役の受身相の動詞の下に用ゐらる。

(四) てん。なんの如きは未來に完了することを豫めいふものなれば、希望の意味を含めて用ゐらるゝこと多し。

(五) つ。ぬ。けり。はともに連用形の下につゞく助動詞なり。

(六) 加行變格活用の來は未然形のこよりきの活用し。し。かにも連る。

練習五、左の活用連語の活用形を示せ。

隠しつ　　行きぬ　　見けり

練習六、左の附圈せる活用連語の時を區別せよ。

(イ) あけはてぬればまかでぬ。

(ロ) 近き頃は西行法師こそ北面のものにて世にいみじき歌のひじりなりしか。

(ハ) 今日は物へまかりぬるといふにいと口をしくてかへりなむとす。

(ニ) 都いでて君にあはんとこしものをこしかひもなくわかぬかな。

(ホ) あの兒こそ瓜一つを取りいでて喰ひつれといふ。

(ヘ) いみじく恨みければとも聞きいれずしてやみにけり。

(ト) 晝過ぐる程かの侍再び來たりけり。

(チ) 盗人の晝臥せりけるを數を盡して捕へてけり。

- (リ) もよとせの花にやとりて過ごしてきこの世は蝶の夢にぞありける。
- (又) いかならむ世にもかばかりあせはてむとはおぼいてむや。

第五章 用言の法

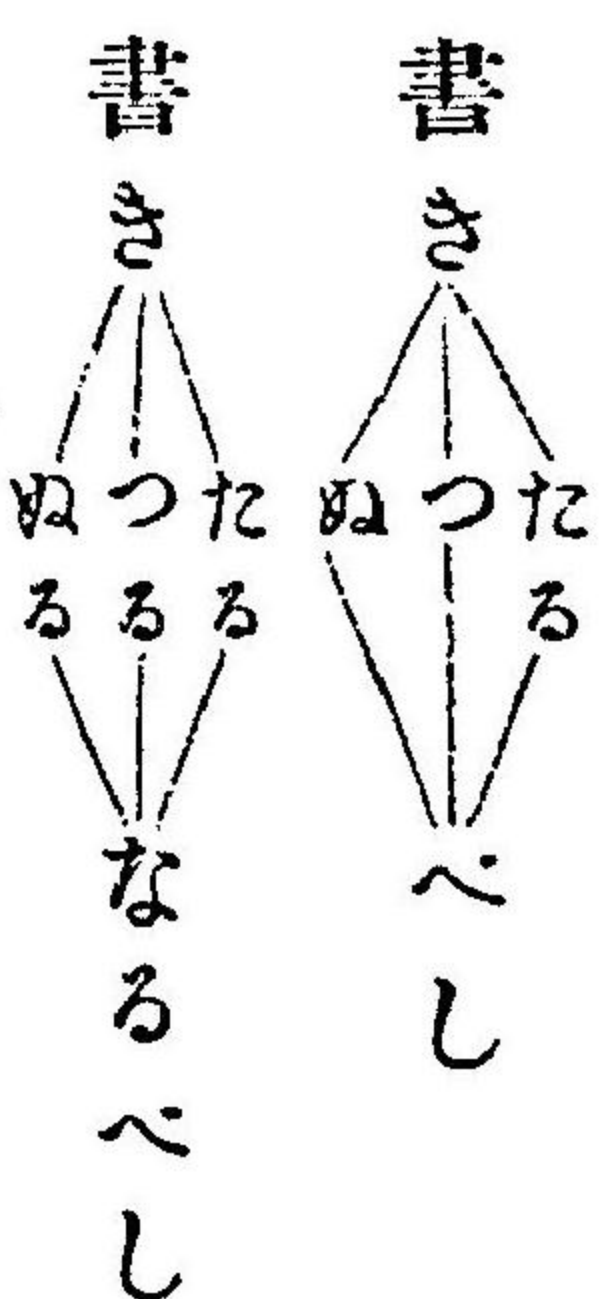
- (21) べしの助動詞は可能義務命令の意味をあらはすために添へらる。
 - (22) 推量の法には四つの時ありその連語は左の如し。
- | | | | |
|----|---------|------|-----------|
| 現在 | 書くべし | 現在完了 | 書きたるべし |
| 過去 | 書きしなるべし | 過去完了 | 書きたりしなるべし |

(其一) 推量の法(四つの時)

(二九) べしの推量法を中古語の時にあつれば左の如し。

(イ) べしの推量

現在 書くべし 現在完了 書ききたるべし



過去 書きしなるべし 過去完了 書きたりしなるべし

書けるなるべし 書きけりしなるべし

(注意) べしの可能義務命令の法をあらはすに用ゐらるゝは明治文典に學べるが如し。本書附録の表に照して之を知るべし。

(三〇) 曩に學べるらんらしめりはいづれも推量の法をあら

はすに用ゐる助動詞にて、らんはだらうの意らしはらし
 い、めりはと見えるの意なり。けんはらんの過去の推量を
 あらはすものにて、時の助動詞と法の助動詞とを兼ねた
 るものなり。

三

(口) らんの推量

現在 行くらむ 現在完了 行き



過去 行きけん 過去完了 行き



三

(ハ) らしの推量

現在 行くらし 現在完了 行き



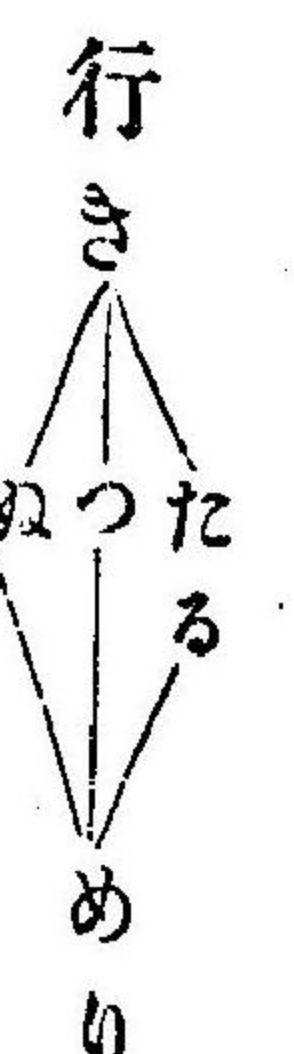
過去 行きけ(る)らし 過去完了 行き



三

(ニ) めりの推量

現在 行くめり 現在完了 行き



過去 行くめりき 過去完了 行き



(注意)

(一) 指定の助動詞なりの加はりて、なるらんなるらし、なるめり等となることあり。法の價値に於ては差異なし。

(二) けるらん、けるらし、た(る)らん、なるらしなどとは、らと重る時はるを省くを普通とす。

(三) なるめり、た(る)めり等のるはんとなりて、なんめり、たんめり等といひ、またなめり、ためりともいふ。

(四) めりの過去完了は用例未だ見當らず。

(其二) 假定の法(二つの時)

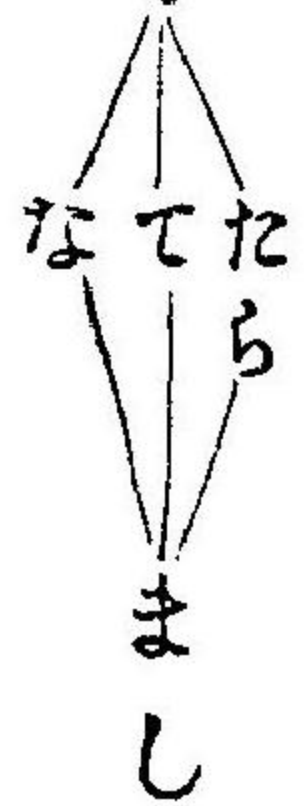
(三) 曩に學びたるましは假定の法をあらはす助動詞なり。實際には然らざること明瞭なるを、かくあらばと假定して言ふときに用ゐる。左の例を見よ。

この御子生れおはせざらましかば、藤氏の榮はいとかくしもおはせざらまし。

皇子の生れ出でたること、又そのために藤氏の繁昌せるは事實なり。それを事實に反して假定したるなり。すべて推量の法は實際あり得べきこと、又はありても知らぬなどを推測していふときに用ゐれども、ましは實際に然らざると明瞭なる場合に用ゐるなり。よく之を辨別すべし。

(三) 假定の法には二つの時あり。その連語左の如し

現在 行かまし 現在完了 行き



(注意)

(一) ましは未然形につゞく助動詞なり。

(二) 時法の助動詞の意義轉換することは現今の文語に同じ。(明治文典卷二、第十章を見よ。)

練習七、左の文につきて用言の法と時とを區別せよ。

- (イ) わはれことしの秋もいぬめり。
- (ロ) 春過ぎて夏來にけらし。
- (ハ) 龍田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶えなん。
- (ニ) すさまじく覺しぬべき御氣色なめり。

- (ホ) 世の中にあらましかばとおもふ人なきが多くもなりにけるかな。
- (ヘ) あたり遠きは匂もまことに百歩の外もかをりぬべき心地しけり。
- (ト) まして龍を捕へたらましかば事もなくわれは害せられなまし。
- (チ) かゝればこそ昔の人は物はまほしくなれば穴を掘りてはいひ入れ侍けりぬ。

第六章 用言の式

- (23) 打消をあらはす助動詞にはずざりの二つあり
- (24) 今文にて打消の連語を作れば、

現在 書かず

過去 書かざりき
 未来 書かざらん

となりて、完了の時を否定することなし。

- (三六) 中古語にては完了の時をあらはすたりの下にもつきて、完了の時をも否定す。之を表に示せば左の如し。左表を見よ。つには上につきて、ざりつとなる。

現在 書かず 現在完了 書きたらず

過去 書かざりへき 過去完了 書きたらざりへき

未来 書かざらん 未来完了 書きたらざらん

- (三七) 推量法、假定法の連語も亦打消の助動詞を探りて、否定の式となることを得。別表を見よ。

- (三八) 疊に學びたる助動詞じは、今文にも用ゐるまじと同じ

く、推量の法に打消の加はりたるものにて、法の助動詞と時の助動詞とを兼ねたるものなり。然れども他の推量法の如く多くの時を有せず。

第七章 用言の相

(25) 動詞の相には通常、相受身の相、使役の相、使役の受身の相あり。

(26) 通常、相には助動詞を添へず、受身相には、らるを用ゐる、使役相には、さす、又は、しむを用ゐる、使役の受身相には、せらる、させらる、又は、いめらるを用ゐる。

(三九) 中古語の相のあらはし方は今文に同じ。但し今文には使役相、使役の受身相にしむ、しめらるを用ゐること多し。
(四〇) 相を有する動詞も亦それく時、法、式を有することを

得。附録連語表及び明治文典卷二附録第一表参照

練習八、左の文の相を區別せよ。

- (イ) 日に重り給ひて、たゞ五六日の程にいと弱うなれば、母君泣くく奏してまかでさせ給ふ。
- (ロ) 造り重ねたる殿舎の、烈しき風に吹き立てられて、灰燼地にほとばしりければ、如何なるものか助かるべき。
- (ハ) なき事によりかく罪せられ給ふこと、かしこくおぼし歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。
- (ニ) その宮に養はれ給へれば、同じ處にすませ給ひけるにや。

第八章 敬語、謙語の助動詞

(27) 敬語の意味をあらはすには、受身相、使役の受身相と同様の助動詞

を用ゐる。

(28) 給ふ、奉る等の動詞も敬語の助動詞として用ゐらる。

(29) 相の助動詞と給ふ等の助動詞とを重ねたるものも亦敬語なり。

〔三〕 御元服も院にてせさす。

六月の初つ方朱雀院に行幸せさす。

右の如く、中古語にては使役相のみにて敬語の意味をあらはす。

〔三〕 月頃御琴の音をも承らで、久しくなり侍りにけり。

右の如く侍りの動詞も亦敬語の助動詞として用ゐる。

〔三〕 琵琶の手なむ大臣には及び給はずと思ひ給ふるを、

右の例にて、第一の給ふは四段に活用して、先方の動作を敬ひていふもの、第二の給ふは下二段に活用するものにて、此

方の動作を卑下していふものなり。

練習九、左の文より敬語を摘出せよ。

(イ) いかで訪ひ給へかと思ひ給ふるに、音づれもし給はぬなむう
らめしく思ひ侍る。

(ロ) 四月二十日帝おり居させ給ひ、春宮四つにならせ給ふに譲り申
させ給ふ。

(ハ) 弓のすぐれて上手どもありければ、めしいでて射させ給ふ。
一人の翁さてもいくつにかなり給ひぬるといへば、今一人の翁
いくつといふことも更に覚え侍らすといふ。

(ホ) このおとい作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感じ給ひて、
御衣給へりしを、鏡紫にもて下らしめ給へりければ、御覽するに

いとよその折おほしいづ。

第九章 助詞

接續の上よりいへば、

(30) 助詞には、**が、に、を、へ、より**の如く、體言にも用言又は用言連語にもつくものあり。

(31) **と、ども、ば、で**の如く、用言又は用言連語の下にのみつくものあり、意義の上よりいへば、

(32) **や、か**の如き疑問の助詞あり、**や、かな**の如き感動の助詞あり、**よ**の如き命令の助詞あり。

(33) **と、ども、が、に、を**の如きは上と下との相背く場合を結付けて、は二つの事柄の連続を示す。

(34) **のみ、ぞ、こそ**の如きは多くの中より物を取り出していふ時に用ゐる。

中古語に用ゐらるゝ助詞にはなほ左の如きものあり。
〔三〕 遠つ。祖。

秋の末つ方、

右のつは「花の色」「君が代」といふ時と**の、が**と同じく、體言の下にのみつきて、上の體言と下の體言とを結付けてくるものなり。

〔三〕 なむ。(1) むかし小野小町といふ歌よみなむありける。

し。折しもあれ、生きとし。いけるもの、

だ。に。(ハ) 鳩にだに。三枝の禮あり。

(1) のなむはぞと同じく、多くの中にて一つを取り出していふ

助詞なり。體言にも用言にもつく。用言の下につくときは、連體形よりつくことぞに同じく、この助詞上にあらはるれば下の述語の連體形にて結ぶべきこと亦ぞに同じ。しは休めてにはといひ來れるものにて、一つの物を指して強めていふ意あり。

だにはすらに似て輕きを舉げて重きを證する助詞なり。口語にてでもと譯す。

〔三〕で あはでこの世を過ぐしてよとや。
夜のふくるをしらで月をながめつ。

右のではずでの約りたるものにて用言の未然形につく。

〔三〕と 繪にかくと、筆も及ばじ

右のとはともの意味なり口語に「書かずとよからう」など

いふ時のとに同じ用言の終止形につくこと普通のとの如し。

〔三〕は 風あらくしく吹きたるは。
も 行く方しらずも。
な 契りきなかたみに袖をしぼりつゝ
よ おそろしき事よ
や いとはかなしや
か 白露を玉にもぬける春の柳か
が 老いず死なずの薬もが

右はいづれも感動の助詞なり。がは感動の中に希望の意を含めり。

〔三〕は や あづまはや

か。も。 三笠の山に出でし月か。も。
 が。な。 長くもが。な。とおもひけるかな
 が。も。や。 人にもが。も。や。言つてやらん
 右のは。や。は。前項のは。と。や。と。重りたるものか。も。は。か。と。も。と。
 重りたるものにて、同じく感動の意をあらはすが。な。か。も。や。
 よ。や。も。よ。も。や。よ。な。など。みなこの類なり。今文にも用ゐるか。
 な。も。し。かり。
 〔四〕 な。む。 櫻花ちらは散らなむ。
 ば。や。 心あらん人にみせば。や。
 か。し。 あすまでは散らずあれかし。
 な。む。ば。や。は。希望の意あり。未然形につく。
 このな。む。を。時。の。助。動。詞。の。な。む。と。紛。ふ。べ。から。ず。

時。の。な。む。は。接。續。も。異。り。活。用。も。あ。り。こ。の。な。む。に。は。活。用。な。し。
 か。し。は。意。味。を。推。し。強。め。て。念。を。押。す。意。あ。り。文。の。終。に。つ。く。
 〔四〕 や。は。 色こそみえね香。や。は。か。く。る。ゝ
 か。は。 傾く月のをしきのみか。は。
 右の如く用ゐたるや。は。か。は。は。反。語。の。意。を。あらはすものな
 り。
 〔四〕 な。―。そ。 人な。答。め。そ。
 物。な。い。ひ。そ。
 右のな。―。そ。は。禁。止。の。意。を。あらはす助詞にてな。は。上。そ。は。下
 に。あ。り。て。其。間。に。用。言。の。連。用。形。を。含。み。て。用。ゐ。る。もの。な。り。
 〔四〕 ば。か。り。 亥の時ばかりに 死ぬばかりおるふ
 ごと。に。 枝ごと。に。咲く 年ごと。に。實。る

づ。 月の内に三たびづ。
 が。 親しき友がりゆく
 など。 花を見月を弄ぶなど
 まに。 神のまに。 風のまに。
 が。 花みがてらに
 す。 夜もすがら
 も。 月のから。 月のはりと思ふものから

右等は皆副詞的連語又は句を作るに用ゐる助詞にて、體言にのみつくものあり、體言にも用言にもつくものあり。

練習十、左の文につきて助詞を指摘し、その意義を述べよ。

(イ) よき折ふし生れ出で給へりしぞかし。

- (ロ) 天つ風雲のかよひち吹きとちよ。
- (ハ) 鼻は高くて色なむ少し赤かりける。
- (ニ) いたく軽々しきふるまひなせさせ給ひそ。
- (ホ) 花をしみれば物思もなし。
- (ヘ) 月の光涼しげに澄み渡りて東の妻戸よりさし入るにぞすこしは心ものどまるやうにてなむ。
- (ト) 世の覺やむごとなしと申すも恐なりや。
- (チ) 底ひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ浪はたて。

第十章 助詞を添へてあらはす 種々の法

(35) 疑問の文にはか、やの如き疑問の助詞、述語の下にあらはるゝこと

多し。

(36) 感動の文にはかゝの如き感動の助詞、述語の下にあらはるゝこと
多し。

〔四〕 用言は活用の命令形によりて命令法をあらはし、又命令義務、可能にはべし、推量にはべし、なるべし、らんらしめり、假定にはまし、等、それ〴〵法の助動詞を添へて種々の法をあらはすこと、これ迄學び來れるが如し。
時の助動詞の意義、法の助動詞に轉じて、ん、たらん等の推量の意味となりて、ん、なん等の希望の意味となり、けり、なり、けりに詠歎の法を示すが如き、又已に之を學べり。
この外なほ助詞を添へて、命令、希望、疑問、感歎等種々の法をあらはすことを得、今その中、中古語に最も大切なるもの二

三を擧げん。

〔五〕 津の國の難波の春は夢なれや。
隠るゝまでにかへりみしはや。

右は感歎の助詞を添へたる例にて、いつれも感歎の意をあらはせり。

〔六〕 (イ) おもひきや雪ふみわけて君をみんとは
(ロ) 君に二心われあらめやも

右は疑問の助詞やを添へたる例にて、いつれも反語の意をあらはせり。(ロ)は今の文にてあらんやといふに同じ。

〔七〕 (イ) けふひと日吹かであらなむ
(ロ) この花を一枝をらばや

(イ)は希望の助詞なむ。(ロ)はばやを添へたる例にて、いつれも

希望の意をあらはせり。

〔四〕物おもふわれに聲なきかせそ。

右は禁止の助詞を添へて、命令の法をあらはしたるものなり。

〔五〕君をみしがな。

家の風を吹かせてしがな。

おもふとち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅寝してしが。

右は希望の助詞がを添へたる例なり。すべて希望は未だ成立たぬことを成立てかすと希ふ意あるに、右の例はすべて過去の時より連れり。これは口語にていへば「あつたらよからう」といふ時のたらに同じく、希望することを、已に成立ち

たりと見做していふため、過去の時にていひあらはすなり。

(五二)(五三参照)

練習十一、左の歌の法をあらはす助詞を指摘せよ。

- (イ) あたら夜の月と花とを同じくはあはれ知らん人にみせばや。
- (ロ) わすれめやよるべも浪の荒磯をみ船の上にとめし心を。
- (ハ) 櫻花ちらばちらなむちらすとて故郷人も來てもみなくに。
- (ニ) 焼かずとも草はもえなむ春日野をたゞ春の日にまかせたらなむ。

第十一章 助詞に連る句

(37) 助詞のばは未然形につゞき又已然形につゞく。

(38) 助詞のともは終止形形容詞は未然形についきどもは已然形についく。

(39) ばは上下相應する時に用ゐるとどもは前後相背く時に用ゐる。

〔五〕 (イ) 書かば (ロ) 書けば

(イ) の書かばは「書くなら」の意にて未だ書かざるを書くとき定めていふなり。

(ロ) の書けばは「書くによつて」「書いたから」などの意にて已に書きたることを許していふなり。この區別は今の文語にもあり。

すべて未然形よりばに連るときと已然形よりばに連るときはこの區別あり。

〔五〕 書きたらば 書きたれば

(イ) 書きてば 書きなば

書きなば

(ロ) 書きつれば 書きぬれば

書きぬれば

右はたりつぬの時を有する活用連語よりばに連りたるものにて(ロ)は已に書き了へたるを許していふものなり(イ)は未だ書かざれども未來の或る時に書き終へたりと定めていふ意となる。書きたらば「書きたれば」の二つは今の文語にもあり。

〔五〕 (イ) 書きせば (ロ) 書きしかば

右は過去のきを有する活用連語よりばに連りたるものにて(ロ)の已然形より連りたるものは今の文にも用ゐる(イ)の未然形より連れるものは假定の意に用ゐるものにて書かざる事明瞭なるに書きたりとして實際に背きて假定する

ときに用ゐる形なり。「菅公なかりせば」など用ゐるせばは即これなり。今の文には用例極めて稀なり。

〔五〕書かませば 書かましかば

ましの假定法を有する活用連語よりばに連りたる形なり。ましは前にもいふ如く〔三〕〔四〕参照實際の事實に背きて假定する意なれば、この二つの形は其意味に於ては「書させば」といふに同じ。「ませば」「ましかば」二つの形は意義に於て區別なしと見るべし。

〔注意〕

〔五〕〔三〕に説けるものは完了の時よりたりせば、にせば、又はたらませば、たらましかばなどつゞく事もあり。準へて知るべし。

〔五〕

(イ) 悔ゆとも

(ロ) 悔ゆれども

長くとも

短くとも

右の差別も亦〔五〕に説けると同じく、(イ)は事の未だ成立たざるを成立ちたりとみていふものにて、(ロ)は已に成立ちたるを許していふいひ方なり。

〔五〕 (一) 鶯の谷よりいつる聲なくば春來ることを誰か知らまじ。

(二) この御子生れおはさずば藤氏の榮いとかくしもおはせまさざらまし。

(三) 花のこど世の常ならば過してし昔はまたもかへりきなまし。

(四) 世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。

(五) 偽の無き世なりせばいかばかり人の言のはうれしからまし。

(六) 山里に散りなましかばさくら花匂ふ盛も知られざらまし。

右の如く、假定法下にあるときは上には已に成立したる意味の句なしと知れ。又〔五〕〔六〕にとけるせば、ませば、ましかばは假定の意味ある故、其下には必ず假定法を用るべきものなりと知るべし。

練習十二、左の文について圈點を附せる句の意味を述べよ。

(イ) 日悪しければ船出さず。

(ロ) 自らはいみじとおもふらめどいと口惜し。

(ハ) けふこそば明日は雪とぞふりなまし散らすはありと花と見ましや。

(ニ) まして龍を捕へたらましかば事もなくわれは害せられなまし

(ホ) 日の経ぬる数を今日幾日、二十日、三十日と算ふれば指もそこなはれぬべし。

(ヘ) 春立てば花とや見るらん。

第十二章 單語の構造

〔美〕

(イ) 春風 霜夜 あづま琴

高嶺 白絲 いつ年

三つ葵 よみ物 浮橋

(ロ) 細長し 薄暗し 物憂し

有難し

(ハ) 引きある こひねがふ

右の例にて春風は春風二つの名詞の合して一つの単語となれるものなり。細長しは細し長し二つの形容詞より成り、率あるは引く率る二つの動詞より成れり。かくの如く、二以上の単語重り合ひて新しき語を組立つること多し。かく組立てられたる語を複合語といふ。

〔三〕

(イ) 行きたし 大人らし をこがまし
(ロ) 春めく 今めかす 大人ぶ
(ハ) うれしき 高み 心ありげ

(イ) のたし、らしがましの如きは他の単語を形容詞になすもの、(ハ) のさみ、げは名の、めく、めかす、ぶの如きは動詞になすもの、(ハ) のさみ、げは名

詞になすものなり。これらを總稱して接尾辭といふ。かくの如く接尾辭の添はりて単語の作り出さるゝこと多し。

〔三〕

新しぼり 初春
御代 み車
諸人

右のにひはつみもろの如きは獨立しては用ゐられぬものにて、他の単語の上に添ひ、其一部分となりて、それらの意味を言ひ添ふるものなり。これ等を總稱して接頭辭といふ。右の如く接頭辭の添はりて単語の作りいせらるゝこと亦多し。

〔五〕

月日 露霜 あつささむさ

よしあし　　長し短し
かちまけ

右は二つの對照したる單語を組合せたる、熟語にして、單語の如く用ゐられたるものなり。〔五〕にいへる複合語とは異なる。複合語にては上のもの下のものを形容し、下のものは上のものに限定せらるゝを常とす。例へば春風といへば種々の風ある中に春の風とことわるが如し。然れども熟語にては上も下も同等に對立するなり。この區別を辨ふべし。

〔六〕 山々　　川々　　人々
それぐ　　われぐ
長々し　　遠々し
よくぐ　　なかぐ　　おもひおもひに

右は單語を繰返して一つの單語となしたるものにて或は物の數の多きを示し、或は度合の大なるを示し、或は動作の繰返さるゝを示す。
かくの如く同じ單語を繰返して作られたる複合の單語あり。

練習十三、左の文につきて、

- (イ) 其品詞を分別せよ。
- (ロ) 動詞、形容詞の活用の種類を話せ。
- (ハ) 活用連語の時法を話せ。
- (ニ) 敬語の助動詞を示せ。
- (ホ) それぐの動詞の主語を擧げよ。

左近中將に藤原道信といふ人ありけり。爲光大臣の子なり。和歌をなむいみじくよみける。未だ若かりける時、父の大臣失せ給ひにければ、歎き悲むといへどもかひなくて、はかなくすぎて、又の年になりたれば、哀は盡きぬものなれど、限あれば服除くとて、かくなむよみける限あれば今日ぬぎすてつ藤衣はてなきものは涙なりけり。

中等教科 中古文典 終

動詞用言連語表

		肯定		否定	
の	通	現在完了 書きぬつたり	現在完了 書かざりつ	現在完了 書きぬつたり	現在完了 書かざりつ
	常	過去完了 書きにけり	過去完了 書かざりけり	過去完了 書きにけり	過去完了 書かざりけり
法	未	未	未	未	未
	來	來	來	來	來
推	現在完了	書きぬつたり	書きぬつたり	書きぬつたり	書きぬつたり
	過去完了	書きにけり	書きにけり	書きにけり	書きにけり
量	現在完了	書きぬつたり	書きぬつたり	書きぬつたり	書きぬつたり
	過去完了	書きにけり	書きにけり	書きにけり	書きにけり
	現在完了	書きぬつたり	書きぬつたり	書きぬつたり	書きぬつたり
	過去完了	書きにけり	書きにけり	書きにけり	書きにけり

法の	推	量	の		法	命令 の法	法の定假
<p>過去完了 書きたりけり</p> <p>未 來 書かん</p> <p>未來完了 書きならん</p>	<p>現在 書くべし</p> <p>現在完了 書きぬべし</p> <p>過去 書きけるなるべし</p> <p>過去完了 書きたりけるなるべし</p>	<p>現在 書くらん</p> <p>現在完了 書きぬらん</p> <p>過去 書きけん</p> <p>過去完了 書きたりけん</p>	<p>現在 書くらし</p> <p>現在完了 書きぬらし</p> <p>過去 書きけ(る)らし</p> <p>過去 書きにけ(る)らし</p>	<p>現在 書くめり</p> <p>現在完了 書きぬめり</p> <p>過去 書くめりき</p> <p>過去完了 書きぬめりき(?)</p>	<p>現在 書くべし</p> <p>現在完了 書きぬべし</p> <p>過去 書くべかりけり</p> <p>過去完了 書きぬべかりけり</p> <p>未 來 書くべからん</p> <p>未來完了 書きぬべからん</p>	<p>現在 書くべし</p> <p>現在 書くまし</p> <p>現在完了 書きなまし</p>	<p>注</p> <p>(1)この表は通常の相と助動詞との連結を示せるものなり。受身相、使役相、使役の受身相を有する動詞及び形容動詞の連結は之に準じて知るべし。</p> <p>(2)現在完了の書けりの形は表中より除けり。すべての動詞に通ずるものならざればなり</p> <p>(3)表中(?)印を附せるは實際にありうべしとおもふ形にて、古書に未だ其用例を發見せぬものなり。</p> <p>(4)べかりに連結したる形より更にらん、らし、めり等の推量助動詞に連るものあり。今之を省けり。準じて知るべし</p> <p>(5)にたり、たりつの如き、完了時の二つ重なるものは之を省けり</p> <p>(6)本表は明治文典卷二附録の表と對照すべし。</p>
<p>過去完了 書きたらざりけり</p> <p>未 來 書かざらん</p> <p>未來完了 書きたらざらん</p>	<p>現在 書かざるべし</p> <p>現在完了 書きたらざるべし</p> <p>過去 書かざりけるなるべし</p> <p>過去完了 書きたらざりけるなるべし</p>	<p>現在 書かざらん</p> <p>現在完了 書かざりつらん</p> <p>過去 書かざりけん</p> <p>過去完了 書きたらざりけん</p>	<p>現在 書かざ(る)らし</p> <p>現在完了 書かざりつらし</p> <p>過去 書かざりけ(る)らし</p> <p>過去完了 書きたらざりけ(る)らし</p>	<p>現在 書かざ(る)めり</p> <p>現在完了 書きたらざ(る)めり</p> <p>過去 書かざ(る)めりき</p> <p>過去完了 書きたらざ(る)めりき(?)</p>	<p>現在 書くべからず</p> <p>現在完了 書きたるべからざりつ</p> <p>過去 書くべからざりけり</p> <p>過去完了 書きたるべからざりけり</p> <p>未 來 書くべからざらん</p> <p>未來完了 書きたるべからざらん</p>	<p>現在 書くべからず</p> <p>現在 書かじ</p> <p>現在完了 書きたらじ</p>	

明治三十八年三月廿一日印刷
明治三十八年三月廿四日發行

中等教科中古文典與附
定價金貳拾零錢

著 者

芳 賀 矢



發 行 者

東京市神田區裏神保町九番地
合資會社 富 山 房

代 表 者

合資會社富山房社長
坂 本 嘉 治 馬



印 刷 者

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地
仁 科 衛

印 刷 所

同 所
厚 信 舍

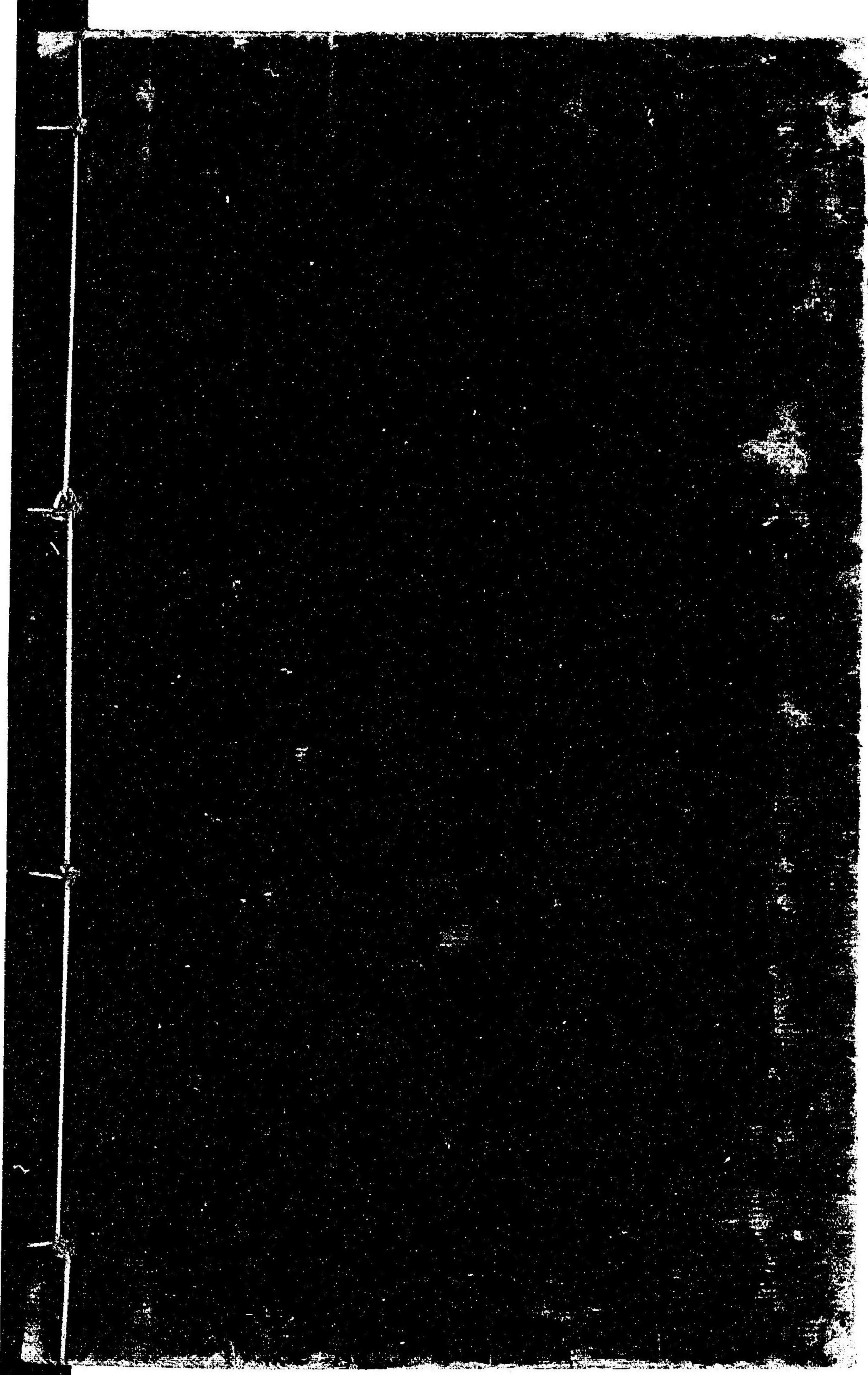
發 兌 元

合資會社

富 山 房

(電話本局) 電報 略號 (ヤマフ)
一〇三六番

1875-1876



1875-1876